
しんやく「ももたろう」

卯月弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しんやく「ももたろう」

【Nコード】

N9003B

【作者名】

卯月弥生

【あらすじ】

「おじいちゃん！本読んで！」「なんの本だい？…ももたろうか。そうだな…じゃあおじいちゃんが話してあげよう」「本は読まないの？」「そうだなあ。本を読んであげた後に話した方が面白いかもしれない」「へえー！じゃあ早く読んでよー！」「はいはい…むかしむかし」

前編（前書き）

昔話 ももたろうのネタバレがあります。注意！

前編

あるところに鬼ヶ島という鬼だけが住んでいる島がありました

その島はごつごつとした岩山ばかりでしたが、鬼たちは岩をバリバリと食べて生きていました

そこには鬼たちの村がありました。鬼たちはその村の中で平和にくらしていました

ときどき人間の住む人ヶ島にいく鬼もいましたが、人をおそうことはありませんでした

それは遠い祖先の間で、鬼と人間の約束があつたからと言われていましたが、いまは誰も覚えていません

人間たちも同じようにその約束のことは覚えていませんでした

鬼ヶ島と人ヶ島はとても離れていたのに、人は鬼のことをえたいのしれない化け物と思っていました

しかし鬼たちは村長さんの下でとても静かに暮らしていました

ある日、村長のところに一匹の鬼が慌てて飛び込んできました

真っ赤な体からは汗がふきだし、つぶれたはなからは荒い息を吐いています

た　　たいへんです　村長

いったいどうした そんなに慌てて

「ねじれ」と「キバ」が人をおそったそうです
なに それはまことか

「ねじれ」と「キバ」の兄弟は村の中でもきらわれ者でした

いつも弱いものをおどし、いじめていたので村長も大変困っていました

村長はすぐに二人を呼び出しました。二人はおとなしくやってきました

いつもと様子がちがう なにかあったのか

村長は二人に事情を聞きました

どうして人をおそったのか おきてを忘れたのか

「ねじれ」はいました

人間はおれたちをおそれている むかしは仲良くしていたのに
いまではすがたを見せれば 殺そうとする

しかし だからといって人を殺してはならん 鬼には鬼の 人には人の 住むべき場所がある

「キバ」はいました

では おれたちは梅を 桜を みることは出来ないのか 川のせ
せらぎも その音色も 聞くことは出来ないのか

「ねじれ」もいました

この間は都でびわを弾いていたら もののふに斬りつけられた
人はおれたちが好きで人を食うと思っている

二匹は交互に言います

おれたちは好きで人を食うわけじゃない 外にでるときは 化け
てでる

そうだ 山や川を見て 音楽をきいて 帰ってくるだけだ

それなのに人間は おれたちを殺そうとする

おんみょうじをよんで かじきとうをして しょうたいをあばこ
うとする

おれたちを あくりょうだと 思っている

さつき むこうの浜で人に囲まれた もののふたちだった

「キバ」の足にも矢がささった おれもあやつく角を折られそう
になった

はなしなんか きいてくれなかった

ころさなきや ころされてた

だから ひとを おそつた

さいごはどちらが言ったか、村長には分かりませんでした

お前たちの話は分かった みんなには私から言っておく

村長はそういうと、二匹をかえしました

これで 人間とのたたかいは さけられない

村長は、静かに思うのでした

次の日から、鬼ヶ島にいへんが起りました

若い鬼たちがいなくなってしまったのです

人をおそつた鬼の話を聞いた若い鬼たちは、人間のすみかを荒らし始めました

都に居ついて人をくらう 山道で人をくらう 人に化けて女をくらう

人間たちのいだいていたばくぜんとした不安は、現実になりました

桃太郎が鬼退治に出かけたのは、このときです

前編（後書き）

中編に続きます

中編

あるところにおじいさんとおばあさんがいました

おじいさんは山へ柴刈りに　おばあさんは川へ洗濯にいきました

おばあさんが川で洗濯をしていると　上流から大きな桃が流れてきました

その桃を家に持ち帰ってあげてみると　中から元気な男の子が出てきました

二人はこの男の子を育てることにしました

男の子は桃から産まれたので　ももたろうと名づけることにしました

残った桃を庭に埋めるとみるみる育ち　なんと立派な桃の木が生まれました

この桃の木は毎年花を咲かせるものの実がならず　なんとも不思議な木でした

それでもももたろうは二人の愛情を受けてすくすくと育っていききました

ももたろうが12歳になったある日　おじいさんがいつものように柴刈りから帰ってくると　村の人が庄屋の屋敷の周りに集まっています

もし 皆さんで集まってどうしましたか
太郎さん まだ何もご存じないのですか とうとうでたのですよ
鬼が
なに 鬼が出たと

いま都の人々の間では 鬼が洛中に現れたことで持ちきりでした
しかしそれも都だけのこと

まさかこんなところまで鬼が来るとは誰も予想していなかったのです

それで 一体どこに出たのですか
それが浜辺の方だと なんでも権作が鬼に食われてしまったらしい
なんて恐ろしい
太郎さんも気をつけなさい

おじいさんは家に帰ると おばあさんと桃太郎にこの話をしました
するとももたろうがすつくと立ち上がると こう言いました

おじいさん おばあさん いままで私を育ててくれてありがとうございます
ございました

いま都には鬼が現れ そしてこの村にも被害が及んでいます
私が鬼を退治しにいきましょう

それを聞いた二人は驚きました

確かにももたろうは生まれから不思議な子供でしたが まさか鬼退治に行くなどと言い出すとは思ってもみなかったからです

待ちなさいももたろうや 鬼は凄い力と強靱な牙を持つという
そんなものに敵うわけではない

二人は必死に説得を続けましたがももたろうの気持ちは変わりませ
ん

とうとう二人も折れ せめてももたろうを立派に送り出そうと決め
ました

おじいさん 私が誰だか道行く人にもわかるように立派なのぼり
を作ってください

おばあさん 誰もが頬を落とすような美味しい黍団子を作ってく
ださい

言われた通りにおじいさんはのぼりと服を おばあさんは美味しい
黍団子を作りました

ももたろうは庭の桃の木から枝を一本取って来ると それを削って
木刀を一振り作りました

そしてついに出発の日がやってきました

おじいさんの作ってくれたのぼりを背に

おばあさんの作ってくれた黍団子を腰にくくり

木刀を腰に携えてももたろつは言いました

それではおじいさん おばあさん 行ってきます

中編（後書き）

後編に続きます

後編（前書き）

完結編です

後編

むかし むかしのものがたり

鬼と人とのものがたり

昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました

おばあさんが川で洗濯をしていると、大きな桃が流れてきました

その桃を割ると、中から元気な男の子が生まれました

二人は男の子に桃太郎と名付けました

桃太郎はすくすく育ち、立派な青年になると、二人に鬼退治に行くと言いました

二人は止めましたが、ついには言われた通りきびだんごを織を与えました

桃太郎は道中猿、雉、犬を家来に従えて鬼ヶ島を目指しました

そして鬼たちを懲らしめると、財宝を抱えて帰りました

そして幸せに暮らしたそうです

めでたし、めでたし

ついに桃太郎は鬼ヶ島にたどり着きました。

鬼ヶ島に乗り込んだ桃太郎は大きな声をあげました

「私は桃太郎と言うものだ。人ヶ島からやってきた。大将はどこにいる」

その声を聞いて、村長が出向きました。

私がここの鬼達をとりまとめさせてもらっている

「そうか、あなたが鬼達の大將か」

人間よ。あなたが何故ここに来たのか、目的は何か、私は分かっている

「そうか」

どうやら鬼と人とは対立せねばならないようだ

「そうか。これも神仏の定めたことだろう」

神にも仏にも会ったことはないが、なんとも意地が悪いことだろう

桃太郎は微笑いました。村長も微笑いました

「では、始めようか」

ああ

一人と一匹は距離をとり、構えました。一人は上段に木刀を、一匹は太い腕を脇に引き絞りました

その様子を桃太郎の従者の『いぬ』『さる』『きじ』の三人と、大勢の鬼達が見守っていました

一人と一匹はおうつと息を吐き出すと、振り下ろし、振り上げました
大きな音が、しました。とてもとても大きな音がしました。

「本当にいいのか」

鬼退治に来たというのに手ぶらでは帰れまい

「…よろしく頼む」

私はあなたに負けた。それを多くの鬼が見ている。少しは血気盛んな鬼らも収まるはずだ。

いつまで均衡を保てるかは分からない。しかし、私が生きている
うちは、なんとかしてみよう

「その言葉を聞いて、ようやく私も皆に伝えることが出来る」

もしまたお互いにいがみ合うことがあったら、それをつかって欲しい

「これは、刀か」

我々の頑強な首ですら、落とすことが出来るだろう

「使う機会が来なければいいが」

それは、私も同感だ

「私達は二度と会うことが無いだろう。そして『ひと』として言わせてもらおう。さようなら」

私達は二度と会うことが無いだろう。そして『おに』として言わせてもらおう。さようなら

むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました

おばあさんが川でせんたくをしていると、大きなももが流れてきました

そのももを割ると、中から元気な男の子が生まれました

二人は男の子にももたろうと名付けました

後編（後書き）

おとぎ話や童謡は、シンプルだけに色々な解釈を取れると思います。さらに、皆があらすじを知っているために、余計な描写を入れる必要が無いという利点もあります。今回は細かい表現は読み手に委ねる形にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9003b/>

しんやく「ももたろう」

2010年10月9日11時18分発行